

# 『誤表現と誤解』

——言語の伝達機能に関して——

山内潤三

はじめに

(一)——研究の意義

(二)——言語行為と価値

(三)——伝達機能(概念図式)

(四)——伝達の三過程(時枝説について)

(五)——伝達に関する諸問題

(六)——「場」の構造と理論

(七)——誤表現・誤解の場と伝達成立不能の場

(八)——ことばの誤りの三構造

a 主体的場面 b 客体的事態 c 反省的観察の場

(九)——いわゆる「正誤」の相関性

(十)——誤表現・誤解の分類調査について

(出)——結び

## はじめに

「誤表現」とは、一般に言語の誤用(誤用イ)と呼ばれるもの、時枝誠記博士の「誤表」(誤表ca)にあたる。「誤解」とは「正しい理解」に相對し、「曲解」に隣接すると一応觀念的に定義されるものであるが、こゝでは「不十分な理解」と一応措定しておく。(詳細は(目録以下に述べる))

何故こうした目新しい術語を論文名とし、その「はじめ」に定義めいたことを前書きしなければならないか。これこそ以下本論の目的とするところであり、従来の言語觀又は言語研究とは些か異なる視点を以て、それらを記述して行こうとする態度にはかならない。

## (一)

まだそう古くない時代まで、いやはっきり云えば、現代の人々の中でも、次のように考えている人は少くない。即ち、言語は一つの理想体系を有していて、そこには純正にして神聖な「美しい国語」があり、これと異なる異質異形の言語表現は、常に正規の形に修正されるべきものとする考え方である。つまり言語にはある定った基準があつて、その基準が規範性を持ち、統制力を有していると思つてゐる。時には国文学者や作家の中にもそうした考え方で言語を取り扱う手あひがいるから驚かざるを得ない。

果してそのような完全無欠、純正さの権化としての言語が實際に存在するであろうか。また仮りに存在するとして、それは一体どこに実在すると云うのか。辞典と文法がそれであるとその人々は云う。確かに辞典は多くの語の形を何らかの分類において正しく示さんとして居り、文法は、「ことばのきまり」として言語規制に一役買つてゐるように見える。殊に規範文法と称する類がそのようである。あるいはまた、名文を以てそれにあて、あらゆる文の中の最も美しく正しい表現であるとする人もいよう。が果してそれらを実在する言語といえるだろうか。そういう考え方からすれば、言語は使用されることを待つてゐる茶道の名器と何ら変りがない。だから誤用と稱したりする。言語は断じて容器ではない。

次に、假りに一步を譲つてそれを心理的實在と認めたとして、では、一体正しいとは何に對してそう云うのか。正しくないもの、不正なるもの、誤りを犯しているもの、正常でないもの等に對して。勿論である。(アンリ・フレエの「誤用の文法」参照)では言語活動において、何を不正とし、何を誤りとして断定を下すのか。その基準はどこにあるのか。又言語行為自体を考えた時、その何れに責任を負わせようとするのか。

こうした点について從來余りにも輕視されて來た憾みがある。輕視された原因の一つとして、過去の我々が常に感情だけの正義感や観念的批判力を重視し過ぎたことが数えあげられる。つまりそこから生まれる価値意識(価値觀念ではない)が、正しさに優越感を与え、そうでないものに劣等感を与えて輕侮するという習慣を生み出したのである。

それが言語研究の面にもあらわれて來て、言語の誤用と誤解は、頭から恥かしいもの、正當に考えるに価せぬものときめつけられ、一種の言語の過失又は疾病として、只管その修正と治療にのみ力を用いたのである。先に述べた國語教育面において規範文法(それは又文法教育の主幹でもあった)及び文字力養成(書取)を重要視したことがそれである。尤もそれらは言語教育としては結構なことであり、決して輕視すべきことではないが、問題はそれによって事畢れりとし、言語の誤表現・誤解面の研究視野を狭めたことである。

從來研究が為されなかつたと云うのではない。放送局・新聞社關係では、誤り易い語例として云い間違ひ、聞き間違ひ、書き間違ひ、読み間違ひ、の種々な場合が實態調査され、表になり、列挙され、比較検討されて來た。又許容すべき事項として誤りでない表現も取り上げられた。<sup>(註3)</sup>

しかしそれらは何時も正しい器に對するいびつな器としてであり、一段も二段も下層の言語以前のものであり、せいぜいが言語の曠野を行く迷える小羊的存在としてしか眺められなかつた傾向が濃い。

「ことばのあやまり」が嚴肅な(?)言語活動自体であり、當然の、そしてそれだけに、自然のままの言語生活における事實であることを見逃し勝ちであつた。

更にそれらの言語活動を誤用・誤解又は曲解と見なすのは、実に言語觀察の立場にある客觀者の反省的事實であり、「誤表現・誤解」の言語活動自体とは自ら別の、異つた内的(心的)言語活動、いわば二次的に起る言語反省行為であることに注意せねばならない。場の轉換がそこにあることを反省しなければならぬ。「統國語學原論」で時枝博士の云う

「言語の觀察は、常に觀察者自身の言語経験の内省觀察の上に成立する。」(同書P. 16、+7行)

と云う時の内省觀察によるのである。勿論、言語行為の主体がみずからの言表に対してそれを誤表現だと内省觀察することもあるし、第三者の言語行為について觀察者が、自分の言語経験に再構成して、その内省觀察の上にそれを誤表現だと断定することもある訳だが、いずれにしても、誤表現自体と誤意識とはあくまで別個であつて立場の上から判然区別すべきものといわねばならない。後述する如く、誤解とよばれる一連の言語事象についても、この間の關係・事情は全く同様である。

こゝに、我々が日常、読み書き話し聞く言語行為をする時、誤り表現をした、又は誤解をしていると、気付かない折は、(一)内省觀察する觀察的立場に立っていないか、(自己を客体視せず主体的言語活動の状態にあること)(二)若しくは正しい、これでよいという自己の言語経験に徴しての觀察的立場における内省意識によつてゐるか、そのいずれかに立場を置きつゝ、言語活動の主体としての務めを果しているのだと云える。この一事によつても誤表現及び誤解の研究が「言語の本質」――表現意識・表現行為・理解行為・意味理解意識Vの解明にいかん重要であるか推測出来る。殊にそれが正面攻撃ではなく、いわば、背面から、その本質を裏返しにして分析立論出来るだけに、今後ゆるがせに出来ない研究分野と云うべきである。人間自体の研究が、健康者の診断よりも患者の疾病の實際的研究である臨床医学によつて、如何に多くを知ることが出来たかを思うべきであらう。

## (二)

前節(一)において「ことばのあやまり」(誤表現・誤解)が、言語研究の重要な、且、興味ある分野であるにも拘らず、言語に規範性を付与し、虚構の価値基準を設定したため、その研究が十分行われなかった所以を述べた。のみならず、そうした考えが、一般に言語を事物に均しくみなす傾向を助長し、觀念的靜止的言語觀を作り上げる一つの役割を果たす結果となつた。「ことばのあやまり」・「ことばのまちがい」が、それに対応する正しい言語を設定し、それが觀念的實在物となつたのである。ソシュールのラングもこれに近いものである。更に「誤表現」や「誤解」の言語行為自身と、それらをしたと反省し認知した時の意識感情とを混同し、後者の恥かしさや不当や劣等感等の価値感情を前者の「ことばの

あやまり」という言語活動自体におしよめ、こゝに言語というものの実体を曖昧にしまったことについても既に指摘した。

一般に哲学において「存在と価値」は、常に大きな意味を持つ課題であり、哲学の本質でもある訳だが、言語においてもその両者の混同は許されない。まして言語においては存在でなく言語主体の行為であり、一方、価値は観察的・内省的立場における経験再構成による客観化に他ならない。こゝに我々は言語行為とその観察評価の關係について大いに注意せねばならない訳である。

尤もそうだからと云って、こゝに言語研究が言語観察の立場をとるべきだとして、「ことばのあやまり」を単に客観的価値批判を以って修正し、不整を補正するだけであるならば、それは言語形象面の形態変化の試みであるに過ぎず、「誤表現・誤解」が言語本質にかゝわる所の最も重要な部分には何ら触れられていないと言うべきである。

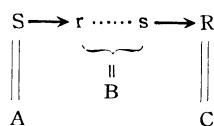
では方法論としてどうすればよいのか。

それにはまず、言語そのものに直面する正当な立場を知らねばならない。つまり「ことば」とは何か。「ことば」はいかにして成立し、行為し、意味世界を開くのか。そう云った言語活動成立の面から、誤表現・誤解について一応内省記述せねばならない。

### (三)

言語の伝達については誰しも疑わない所であり、殊に最近マス・コミュニケーションの研究から、言語の伝達性・通報性というものがかなり重要視され出して来た。しかしまだその時の「言語」を伝達の要具又は容器・機具視することが少くない。我々人間内部における意味意識とその表現・理解の行為自体として把握されることが少い。

そこで、いま、この言語の伝達機能について諸家の概念図式による説明を二三列挙することは、誤表現・誤解が言語成立の可能性・伝達の条件に密接に関連するものだけに強ち無用のことでもなからう。



- S = speaker's stimules (話し手の刺激)  
 R = hearer's respons (聞き手の反応)  
 S → R 実際行動による反応 (又は実際の刺激による反応)  
 S → r 言語行動による反応  
 s → R 言語的代理的刺激による場合  
 A = 言語行動に先立つ実際行動  
 B = 言語行動  
 C = 言語行動につづいて起る実際行動

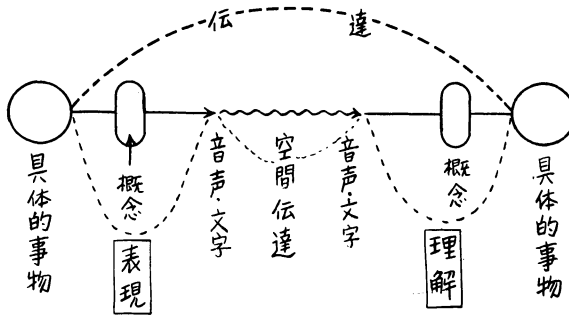
（現代国語学Ⅰ巻ことばの働き所収  
 熊沢 龍 「伝達の可能と条件」の(二)伝達機能の図式 P. 28）

右の伝達機能の図式について能沢竜民は次のように説明している。

SとR即ち、言語行動以前の出来事Aと、その後の出来事Cとは、実際的な出来事であって、一般には人はこれらにだけ関心を持ち、r : sについてはあまり注意しないのが普通である。s ↓ rは話し手の体内に起り、s ↓ Rは聞き手の体内に起る。まったく相離れた二つの神経組織が協同して、一つの刺激に対して有効な反応を示し得るのは、まったくr : s即ちB、言語行動の結果によるのである。一見重要ならざるものが、より重要なものに結びつく時、それは意味を持つといわれる。言語行動それ自身はつまらないものであるが、意味をもつが故に重要なのである。BはAとCを意味するが故に重要なのである。(同書 p. 28)

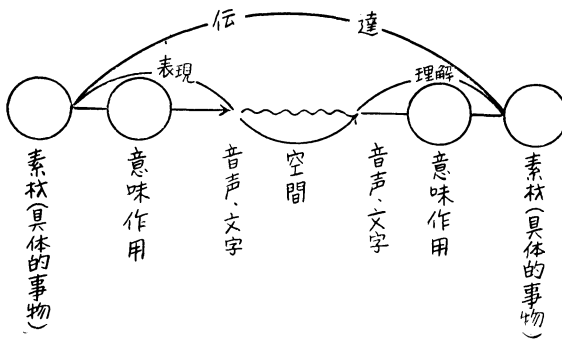
とやはり言語の伝達機能に最も重要性を認めている。今、問題としている「ことばのあやまり」と称されるのは、単に言

語の誤謬が問題ではなく、この伝達性に誤表現や誤理解が大きな支障をきたし、人間社会の複雑高度な機構に影響する所が多い点に問題の重要性がある訳である。ではその誤りは一体伝達のどこに生じるのであろうか。次に言語過程説の立場を固める時枝博士の言語過程図によってそれを検討してみよう。



(A)

『国語学原論続篇』  
(昭和三十年 六月第一版)  
岩波書店  
頁28 伝達の事実  
二、伝達の媒材  
としての音声と文字



(B)

『現代の国語学』  
(昭和三十一年 十二月 有精堂)  
頁192 伝達事実と  
伝達における空間

右について博士は、「言語を音韻と概念(或は思想)との結合体と考へる言語構成説に対し、言語過程説は、言語を、精神、生理、物理的現象であるとする言語理論」(A書頁7)の立場に立って伝達論を進める。そして結論的には「伝達

の成立といふことは極めて悲観的である。」「その成立にはそれ相当の条件を要することであり、伝達の当事者の努力と技術が要求されるといふことである。一言にいへば言語は通じないものであるといふことである。」(A書 P. 27 及 P. 28)と述べる。これは言語過程説の基本的考え方として当然のことであり、筆者(山内)もこの点に關しては全く同様の考えである。即ち「言語は話手の表現行為として、また、聞手の理解行為として成立する。」(P. 26)し、この両者は互に期待と前提を以って行われ、「具体的には常に表現より理解への流れが形成され、話手の思想が聞手に伝達されて、始めて言語の機能が發揮される」(P. 29)訳である。

#### (四)

では、実際に我々が「ことばのあやまり」(誤表現・誤解等)をなすのは、右の言語過程図に徴して、どこに於てであろうか。

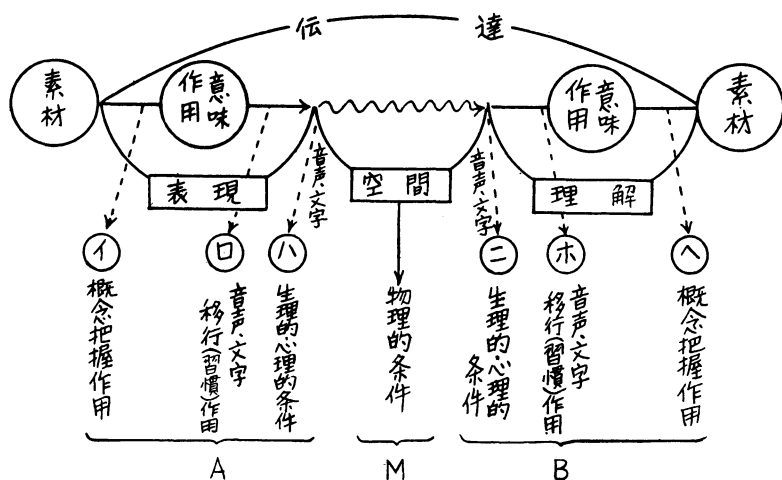
これについて国語学原論結篇の「伝達の種々相―正解、誤解、曲解―」(P. 52)及び「伝達の成否の条件」(P. 57)にそれぞれ簡単な説明があるが、やや概念的と云わざるを得ない点がある。一体に、過程説に於て、その説自体の正否を批判し、その考え方や説明に不備を見出すのは、他の学的立場に立つて推論するより、過程説内部に於て、その中心となる過程自体が問題となる場合を虚心坦懐、觀察することである。つまり、言語機能の過程に変調を来し、それが成立しない時(伝達不能、不完全、不十分、不正等のいわゆる誤表現と誤理解・曲解《及び曲表現》)を種々考察するに如くはないのである。その点未だ同書及び国語学辞典「誤解」の項の記述は十分と云い難く、殊に実例に於てその感が深い。(同書 P. 58 P. 59 には「猫」を「イヌ」(音)「いぬ」(文字)とする誤り、「舟」を「乗りもの」方言で「降りる」を「落ちる」と云う地方(岩手)柿と牡蠣(カキ)の例ぐらいである。又その説明必ずしも適切と云い難い。)

勿論博士は、その重要性について「伝達成否の条件は、伝達過程の詳細の分析によって明かにされる」と認め、前記伝達図によって、

A、表現者の表現過程

M、中間にある空間伝達過程





## B、理解者の理解過程

と三部分に分けている。(A、M、Bの符号及び順序は筆者)

M、が不完全であれば如何にA・Bの条件がそろっていても伝達は成立しない。音声(音響)・文字・機械・光線等の物理的伝達条件である。

A、の表現過程には、それを分けて、①生理的器官(声帯・歯・唇、鼻腔等の発声器官)や神経系統(聾啞・ある種の精神患者・中風や半身不随(文字の書記面)の不備な場合の不成立。②、思想と音声・文字への移行習慣・連合習慣の不完全による不成立。(云いそこない等)③素材の概念把握の方法(意味作用)の問題(不親切な表現法等)などがその過程条件に考えられる。

B、の理解過程に於ては、ほど、Aの対応関係(方向は逆である)が考えられる訳で④に対する③の聴覚不完全(聾啞・盲目者)、②に対する③音声・文字の概念化(意味付与)の不完全連合の場合で、いわゆる勘違いや古語・難語・未知語の類に対する理解不能や不十分がそれである。④に対する③としては、自己流な解釈(我田引水の理解)や、④の表現の概念規定と異なる範疇に意味理解とする時である。

以上を今一度図示すれば上図の如きもの

となる。

(五)

ところで、こうした伝達成立の条件が満たされない時、伝達の不能又は不完全をそこに見る。が、こゝに注目しなければならぬのは、〔一〕、その条件が千差万別であり、時間・空間的にたゞの一つも同一条件の下に行われる伝達というものが無いこと。〔二〕、しかもそれが常により正確な、より好ましい表現と理解たらんことを意識的無意識的に言語行為者は求めていること。〔三〕、それ故にこそ、その伝達そのものの形態にそれ〴〵の理想表現と完全理解を仮構的に設定すること。(正表現と正理解)。〔四〕、更に伝達機能に関して不能・不完全(不十分)と完全とを区別するものは何か。そこから始めて正表現・誤表現と正理解・誤理解が説明出来るものであること。〔五〕、一般的に(又は觀察的立場から)云って誤表現はAに於て、誤解はBに於て生ずることは成立条件としては認識し得るが、ではM、(空間伝達)は、「ことばのあやまり」自体には関連又は責任を持つかどうか。誤表現・誤解の際Mはそのいずれにおいて誤に属するか。そのように一義的(直線的に)考えられるかどうか。〔六〕、そこに於いて、A、M、B及びそれ〴〵の(イ)(ロ)(ハ)の各条件は過程的に一列に並ぶ流れの一つだけでなく、流れる方向と質量的変換とは恰もそこに因果関係を持つかの如く、A、Bはそれ〴〵相関連し合い、誤表現と誤解はその時その場の緊張体系<sup>(正)</sup>によって批判的に決定し得るものであること、〔七〕、然しまた、一方たとい、A、B、Mの各条件のいずれかに不完全があつても、尙人間の直観や直覚性において伝達可能の場合もあること(「目は口程にものを云い」はこの場合とやゝ異なる)そしてそのことは、言語の伝達機能に対して何かを関係づけるものであること等。

これらの諸点に關し、時枝説はその大半を説明し得るように見えるが、(a)誤り表現と誤解における言語の場の構造に關する点と、更に、(b)A→C→B、への表現の流れにおける記号(象徴)の問題及びそれに関わる誤表現・誤解の意味作用の説明は如何にしても不備である、と云わねばならない。特に後者(b)の言語の記号性について、意味意識の記号化(理解の時<sup>(正)</sup>は順逆両方)を説明し得なければこの伝達条件―殊にことばのあやまり―について完全を期することは出来ないと思われる。

(六)

そこで先ず(a)の誤表現A・誤解Bにおける場の様相について考えたい。言語が実際に表現理解される時は必ず具体的場(場面)において実現するのであり、場の力(緊張体系)や方向(脈絡)が言語行動を規制するものであることは言語原理として認めねばならない。(a)節の注目すべき事の「一」として時空的に全く同一条件の伝達の成立はあり得ないと述べたのも、この言語の場の構造と表現(理解)の関係からである。その「二」の正確な表現と理解を無意識的にも求めるすべての言語行為者は、場の緊張体系(緊張気)に自らの行為を合致させ、言語活動の一員として参与する資格を獲得する為の努力者に他ならない。

ところで誤表現と誤解が起る時、言語的場は如何にそれに関係するだろうか。

これを前掲の図のまゝ直線的流れとして考える場合は全く容易である。それはあの図式を一つの円で囲むか、又はあの図を一つの台皿の上に乗せて、その円や皿を言語表現の場とすれば済むことだから——。然しその事が、いやその考え方が図式以上に抽象的劃一に過ぎず、誤表現・誤解とは単にその表現の流れを遮断・転換させることなのだと、それこそ誤解させる弊のある事については既に述べた。実際の「場」の構造はもう少し複雑であり、もっと具体的である。

最近この「場」の理論として時枝過程説の主體的(主客未分的)場面論を發展させて、場面に「客観的立場における場面」とこれを土台とする「主體的立場における場面」の二重(又は二元的)構成を考える場の論が進んでいる。いまだに後者の場の構造の研究法が確立していないが、一応意識の様相と言語体系の類型的連関性によってそれを説明づけている。

今当面する誤表現・誤解における場の構造とその観察も、右の二元的場とその制約・変容の上で思考すべきであると考える。それはまた、誤表現・誤解をそれ／＼の主體的言語活動自体として把握する立場と、それを観察者の内省的事実として「誤り」意識を持つに至る立場への移行とに分けたことにも密接に関係する私の立場である。(本稿(一)及び(二)に既述)そこで、誤表現・誤解における場の説明に当って、場の要点を個条書にした永野賢氏の考え方(「現代国語学」I P. 131)を次に示し、それにより私の考えを述べることにする。

注意 以下A・B・C::a・b・c::の符号は永野氏の規定に従う。故に前記のA・B・Cの用い方とは全然別である。

一、言語活動は、だれか(A)が、だれか(B)に、何か(C)について、何らかの状況(D)において、何かの展開(E)として行われる。

二、Aを「話し手(または書き手。一括して表現者ともいう。)、Bを「聞き手(または読み手。一括して理解者ともいう。)、Cを「素材」、Dを「環境」、Eを「文脈」と呼ぶ。

三、A・B・C・D・Eの間の緊張関係を、言語行動の行われる現場の「事態」と呼ぶ。

四、A・B・C・D・Eが、話し手(または書き手)の意識に反映すると、客観的な、もとのままのA・B・C・D・Eとは必ずしも同じ姿でないa・b・c・d・eとなつてあらわれる。

五、aを「自分」、bを「相手」、cを「話材」、dを「フナイ気」<sup>(註9)</sup>、eを「脈絡」と呼ぶ。

六、a・b・c・d・eの間の緊張関係を、言語行動の主体の「場面」(または「場」)<sup>(註10)</sup>と呼ぶ。

七、話し手(または書き手)の「場面」(P)と、聞き手(または読み手)の場面(Q)とは、別個に成立する。Pを「表現の場面」、Qを「理解の場面」と呼ぶ。理解の場面においては、「聞き手(または読み手)」が「自分」であり、「話し手(または書き手)」が相手である。

八、「事態」は客観的なものであり、「場面」は、「事態」に基づいて、「話し手(書き手)」や「聞き手(読み手)」がそれぞれに構成するものであって、主体的な立場におけるものである。

前に述べた「客観的立場における場面」とは、右の一、二、三に述べているものであり、「主体的立場における場面」とは四、五、六であり、七、八はその両者の実際に関連し合う場面について述べたものである。

## (二)

さて、右の個条書から「ことばのあやまり」の場について考察を進めよう。  
まず客観的事態について考えるならば、

1. A及びBのない時、これは一般に(客観的には)伝達不能である。

## 例

① ベルが鳴ったので受話器を外して耳にあてるが、いくら待っても話し手<sup>(A)</sup> 当人の声が聞えない時、また、講義を聞く学生や講演をきく為集会した聴衆の前に、講師が現れないで、皆が黙って何も考えずに待っている時——Aのない時、

② 遭難等一人危険に瀕して救援を求めて「タスケテクレ」と叫んでも誰も居ない時、相手が居ると思って話しているが相手がそっと居なくなった時。手紙を出したが受取人不在等——Bのない時。

右の例はいずれもA、又はBが存在しないで伝達が遂行されない時である。が、①②はそれぞれP、Qとして主體的には表現の場と理解（但し、何かを理解しようとする、つまり、C及びcのない時）の場を持った訳である。そして、右の①②ともに完全なD（環境）はないが①は予想のdを、②は主體的想像のd（フンイ気）を持っている。E、は伝達不能故何らの展開はなく、eはやはりP・Qの主体内部に於いては、或る程度想像的・観念的に「脈絡」されている。但し①においてAが全くの啞であり、②が完全なツンボ又は盲人であり、それが言語主体者に予め解っている時には、普通始めからA・B・C・D・Eの「事態」もa・b・c・d・eの「場面」もない、つまり言語的場が全然そこに現出しようとさえしないのである。だから、この事から、A・Bともに存在しない時、（言語活動者のA・Bであって、人間自体の存在ではない）つまりA・Bがともに言語行為に参与しない時に始めて客観的にも主體的にも「言語が成立しない」、「伝達が不能である」と完全に云い切れるのである。つまり言語的なものが始めからそこには何もない訳である。今、AかBまたはA・Bともに存在しない場合について考えてみた。

## 2. 次にC（素材）及びc（話材）のない時。

例 ① 最近ラジオなどでやる素人演劇や即興劇場の二人芝居等がその例で、二人は何かを演ずる筈だが、まだやる内容（劇の素材）がアナウンサーから示されていない時——Cのない時。（この場合も、C（話材）は「何か」について予想的だと云えるかも知れない。）

が、もっと完全なのは、全く見知らぬ二人が駅の待合室などで退屈に坐っている。話し合ってもよいが、何ら、話すべきものがない。何について語るといふ気持もなく黙っている時。

② 1. 云わなければならぬ事（C）が沢山あって、どう表現していいか解らない時。

2. 長時間の談話の後、全く話す材料もなくなった時。

右の例の④ではCは現実（客観的に）存在せず、僅かにc（話材）が何かとして存在している時である。④の1.は、C（素材）はあるが、c（話材）として主体（A）がP（「表現の場」）で、把握する仕方の不十分又は未分明の場合である。④の2.は、c（話材）がなくなり、それにつれてC（素材）も客観的に消失する場合。従って、D（d）・E（e）も自然なくなり、A（a）・B（b）は言語行為者としての資格を失うように（つまり、たゞ坐り合う人間像とのみ）成る。一般にC（素材）もc（話材）もない時は言語活動従って伝達は成立しない。（つまり伝達の機構を持っても伝達すべき内容がないのだから）

### 3. D（環境）及びd（フンイ気）のない時——それは抽象的観念的言語の観察場合である。

④ 1. ある事柄について座談会を開く予定で、その時間・場所・人数が等未定の時。

2. 絶えず座談の人（B）が入れ替り出入りして環境が一定しない時。

④ 遅刻して突然に皆の談笑の部屋に入り、話している内容素材（C）も解り、話材（C）も持っているが、そのフンイ気になじめず、すぐには談笑の仲間に入れない場合（いはあってdがない、又は完成しない時）

まずD・dの共に存在しない言語の場は考えられず、単に図式的に観念化した言語を論ずる場合だけであろう。（文法論の例題や旧式言語学の文論・言語構造論など）

実際の言語には、いわば、D（環境）があり、言語主体によりそのDのd（フンイ気）的把握・投影によって実際の言語表現や理解はなされているのである。

④ 1. のようなD・d（Bもこの場合ふくまれる）が決定しない時、このまゝでは実際の伝達は勿論、なんらの言語活動も成立しない。だから必ず「追って日時・場所その他御通知申し上げます」となる訳である。こうした予告や前通知の類はすべて右と同様に解すべきであるとも云えよう。

④ 2. はB（b）の変動により、座即ち言語の環境D（通称の場）が動揺し、従ってb（相手）も安定せず、言語活動がスムーズに行われない場合である。

④ はD（環境）がそこに客観的に実在していても、主体に環境が自らのもの即ちd（フンイ気）として形成されず、E（文脈）も解らないまゝに、a（自分）が言語行為する事を躊躇する場合である。もしdを無視して話せばこの場合、場

を白けさせるだろうし、そのAを自我心の強い不遜な人間、ことばの作法を知らぬ者と、その場の人々(B)のaから思われるだろう。但し急を告げる場合はこの種のdを無視する。その場合次の文脈(E)は陳入者(a)の脈絡(e)に奪われ、そのeが今までのEにとって変わって、その場のDを変化させ、今までの話題(話材c)によるフニイ気(d)は新しい急変を告げるC(c)により、eの作り出す次の緊迫したフニイ気(d')となって現われる。これを場の変異(変移・変化)または移行と云う。(「場面」(d)の転換と云ってもよい。が、場の層位的次元的転換とは異なる。又場の推移なら自然な進行をも意味する。)例えば突然数人談話中の座に飛び込んで来て、次のように叫ぶ場合がそれである。

「各々方、敵の大軍が攻め寄せて来ましたぞ。」

「皆さん、大変です。今、〇〇町の方が大火事ですって」

など。このほか、「お話し中失礼ですが」とことわって話を途中で折るやり方と同様に、D(d)の移行をなすものである。要するに場の環境(D)とその主体的把握のフニイ気(d)がない言語活動は宙に浮いた抽象性しか持たない。一見、フニイ気など感じられない様な無味乾燥な哲学書や極めて客観性を貴ぶ科学学術論文においてでも、その表現(P)及び理解(Q)のフニイ気(d・d')は、言語活動としては存在(内在)するのである。フニイ気をはかる露出計があれば、その針は微少しか動かないであろうが——。いや、dなどは量的でなく質的だから数量的には表わせないかも知れないが——。

4. E(文脈)及びe(脈絡)のない時。これは前項3のD・dの項で触れたように「話し手」と「聞き手」、「書き手」と「読み手」の間に言語活動が交流する時、D・dに関連して必ずあるものである。ない場合は3と同じく抽象論又は何の文か予測がつかない孤立した表現に過ぎない。又後述するようにこの3、4、によって誤表現や誤解の起るのも実に多いのである。(同音異義のあやまりや、トンチンカンな返事、話を通じない、よくは解らないなど云う場合に多い)

例 K 「何たる事だ、私の云った通りになっちゃいないじゃないか、えー？」

N 「何がそんなにお気に召さないのですか、えー？」

「K 「何々、君には、私の云う意味が解つとらんのか。」

右のような会話において、K氏は文脈(E)が客観的に存在すると自分(a)で考えて、その主体的にある脈絡(e)を相手(b)のN君に怒りに駆られてブチまけた。するとN君にはK氏の脈絡(e)が理解されていない。(言語の記号

表現の不足)つまり伝達がその間に完全に行われない。という伝達不良を今度はK氏が理解して、(N君の質問表現は伝達可能であった)三行目の問をK氏が發した訳である。この際に序いでだから説明して置くと、N君がK氏の「何たる事だ」と驚いた内容や「私の云った通り」に当たたる事実が解つて居りながら二行目の答をしたとすれば、これはN君が伝達内容不明を横装した「偽性伝達不成立」であり、偽りの表現(一種の広義の曲表現)である。

それに対して三行目でK氏が、N君(実際に解らないで)の「何がそんなに……か」の質問形を今云つた「偽性伝達不成立」にN君がしていると思ひ過ごして、三行目のような表現をすれば、これを思い過ごしと云う。(そうした場合、後にまたは言外に『何を云う、お前は解っているくせに、また空トボケてみせる、太い奴だ』という憤懣を放つたり、句をせたりするものである。)そう取れないような場合のN君の表現を無理に空トボケと取り、捏造する場合を典型的な曲解の例とする。普通思ひ過ごしも曲解の一つに入れるようだが、こうした差があるのである。或いは思ひ過ごしは誤解の一種に数えるべきものであらう。少くとも私の立場からすれば原理的には誤解であり、表現された意味作用(相手のC(話材))に對する理解意識過剰から來るところの意識的な概念拡張——つまり一種の誤解(後述)である。

論述を元に戻せば、要するに4においてはEの客觀的に實在しない時は、その表現又は理解は抽象化された言語であり、孤立した語又は文の形式的記載になる。若しEがありながら、話し手・書き手(A)と聞き手・読み手(B)がそれ々の把握に於て相異なるe及びe'として言語行為をなすならば、それは全く支離滅裂、言語による完全な伝達は期すべくもないのである。又A(a') B(b↓a')何れかにおいて、敢えてそれをなすならば、前者なら「ひとりよがり」の言語行為となり、「自己流な話し振り」、「我田引水式話法」、「自分だけ解つて他人には読んでも解らない書き方」となり果てると、後者(聞き手・読み手)ならば「自分勝手な解釈」、「勝手ツンボ」(意識的に文脈をゼロにし、相手(話し手)の脈絡を中絶させて伝達を頓挫させるや、極端な例)「解つたつもりでいて解っていない」式のものとなり、伝達が場の推移において脱線するの趨勢を招くのである。それを意識的に行う場合は、前述K氏N君の對話に説明した曲表現(この用語を以て、これについて詳述したものはまだないようである。)・曲解がそれである。つまり、4のE(e)は、3のD(d)とともに、特に「場」として誤表現・誤解に陥る場合の多くに深く影響する。3の場合が意識の反映又は意識による感受であり、4の場合が意識の連関又は意識による筋立てだからである。その反映・感受の仕方(3の時)及び、連関



・筋立ての方法が間違った時、これは誤表現・誤解のそれ／＼となって言語機能に影響して来るのである。

### (A)

以上の(4)節においては、永野氏の「場面とことば」の個条書の一つ一つについて説明しつつ、言語による伝達の可能性について、それを不能・不完全及び誤表現・誤解、また曲表現・曲解の面から検討し考察した。即ち、伝達不能及び伝達の誤りについて、如何に場の構造による影響が大であり、その考察が重要であるかを示した訳である。その場合時枝博士の「場面」よりも、右のように「事態」(客観的立場における場面)と「場面」(主體的立場における場面)の二つを考え、そしてそれを止揚した「場」の上において考えることの方が、より事実に即した「言語的場」の考え方であり、記述の態度であると思われるのである。殊に誤表現又は誤解である事を表現者(A)・理解者(B)自らが、又はその相手が、発見し気付いた場合(第三者として気付く時も(B)に属する)は、その『誤り意識』として起こる反省意識の場は二次的「場」としての主體的認識である。つまりそれは、普通の觀察的立場の「事態」でもなく、ましてや主體的「場面」そのものでもなく「事態」と「場面」を止揚した「場」の反省的具現であると考えるべきである。止揚された所の「場」は普通はそれ自身具現せず、たゞ「事態」および「場面」なのであるが、その「場」の主體的(A・Bいずれでもよい)認識として具現する時は『誤り意識』等の「場」に関する価値意識を持った場合である。

以上ここに誤表現・誤解がどんな特殊な場の構造にあるかを論述した。つまり要約すれば(4)節から(6)節までに先に言語行為の主體性と客観性について考察し、「ことばのあやまり」も表現・誤解そのものは主體的言語活動であり、それは又客観的觀察の対象となることを述べ、(4)節と(5)節に於て、それらの言語の「場」の構造も、主體的立場と觀察的立場があって、その両者ずつ(即ち言語の主體・客観と場の主體・客観の両者)互にそれぞれに相関連し合うものであることを述べ、更にその言語事象に関しそれを誤りと判断するのは言語機能に対する一つの思考作用であり、それを抱合し統一する意識の「場」は、「事態」と「場面」を止揚した(又は重なり合った)「場」なのであると述べたのである。実際に表現者自分(a)や相手(b)の表現・理解を間違いと認める時又は第三者的理解者(B)として、話や文中の誤りを発見しつつ、(又は訂正などして)伝達行為を進める時、それが「場」の具現であるとも考える訳である。

しかしこの誤表現・誤解の意識に関する止揚された言語的「場」の問題は、相手(b)に対する感情変化、話材(c)に対する新しい価値評価の加算、dのフニイ気の変化、eの脈絡の移行等に亘って、その相関性についてまだまだ詳しく観察し理論的にも深めねばならないと思うので、こゝにはこの程度にとどめ、これ以上臆断することは避けたい。

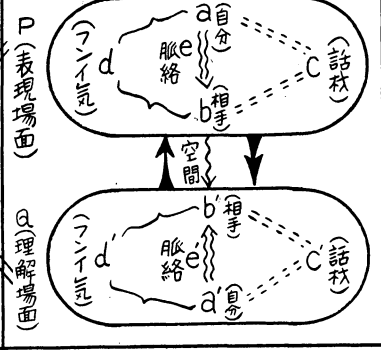
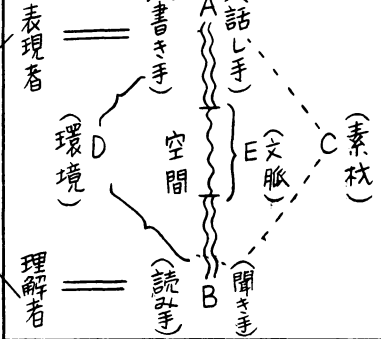
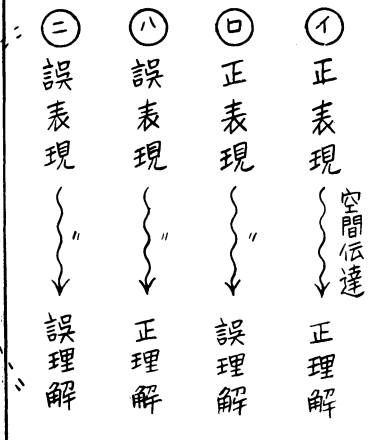

### (九)

さて、こゝで愈々「正と誤」の相対性及び「誤表現と誤解」の相関・相即性について述べるべき段階となった。もともとことばの正誤は、表現・理解の伝達に関すること、語や文自体のことではない。即ち最も重要な言語機能である伝達性が「場」の構造にさゝえられながら実現する所の言語活動自体に関することである。更に換言すれば、言語(ソシユールのいわゆるラング)自体に正誤(例えば正ラング・誤ラング)があるのではなく、表現者・理解者の言語行為(意味思考作用を含む)に於て、その伝達についての反省的観察結果が、正誤の価値評定となるのである。だから言語の伝達を考えない場合は、厳密に云って「ことばの正誤」は問題にならない。少くとも、それについて云う必要はない。が実際問題として、「言語の伝達性を考えない言語」などという矛盾判断を含む同一判断など無意味であり、もし仮りにかかる抽象的性格しか無いものを言語と考え、更にその正誤を仮空的に設定するとすれば、それは言語の本質を解せぬも甚しく、真実の前の物笑い草に過ぎない。

これらについては序からⅥまでに述べた言語伝達機能及び「ことばの誤り」の「場」構造の説明で既に明確に云えることである。

ところで言語表現・理解の正誤は、その前提もしくは基盤に、言語の成立条件及びそれによる伝達可能・不能の問題があつて、これらを離れてもまた「正誤」の問題は考えられない。だからこの節は密接に(四)・(五)節の伝達の可能性と成立条件(伝達不能の場合について等参照)の項に関連し、相照応して考えて行かねばならない。

そこで表現の正誤と理解の正誤に関する概念図を次に掲げる。

	伝達図と伝達各種		主体的言語活動
伝達不能	場の構造		
場の場面 右のP内・Q内・及び P・Q関係・空間に欠陥のある時			客観的言語行為
場の場面 右のA・B・C・(D)(E)及び空間のどこかに欠陥のあるとき	場の場面 右のA・B・C・(D)(E)及び空間のどこかに欠陥のあるとき		
表現 (不成立) X 理解	場の場面 右のA・B・C・(D)(E)及び空間のどこかに欠陥のあるとき		価値批判的言語観察
			

但し右は、あくまで概念図である。図式による表示以外の論理関係や各種実態については、何ら示し得ていない。が上・中二段は前に詳細な記述をした。それで以下、下の段の実際について、価値批判的言語観察の立場から各種伝達を見て行く。

但し、下段の名称には、一応正(誤)表現・正(誤)理解と名づけたが、この正・誤の名称は私自身の考えとは実際に

合わず、他の命名をと思ったが、正誤の用語批判ともなろうと考え、そのままにした。

④は、②③に相対し、最も理想的で、完全な伝達を意味し、好ましく、すべてがそうありたい場合である。然し正しく表現し、それを正しく理解するとは、どうすることか。正當に、又は適正にという意味なら解るが、フロベールの云うように文の理想形は、その場にある唯一絶対のものであり、他の書き方・話し方は真正のものではない——ある時ある所における表現はたゞ一つのみ——という考え方をすれば、唯一絶対以外の表現は、原理的に誤表現といわれるのではあるまいか。すると、正理解もまた、唯一つとなり、理想的には、相手と完全に同じ意識内容(意味作用)を持たねばならなくなる。そう云うことが果して可能かどうか。こゝに③節に引用した時枝博士の完全な「伝達の成立は極めて悲観的であり」「一言にして云えば言語は通じないものである」という言葉を想起すべきである。先に私も基本的考え方としては、それと同様の考えだと述べたのも、こうした意味においてである。

つまり右図上段のPの楕円とQの楕円が全く同一になることは厳密に云って絶対に有り得ないのである。恐らく「自問自答」や「もう一人の自分との魂の対話」など呼ばれるものが、P $\parallel$ Qに近いものだが、その場合でもa $\parallel$ a'、b $\parallel$ b'、c $\parallel$ c'……の等式関係を持つ事は困難と考えられる。即ち正表現と全く相等的な理解(正理解)というものは、實際の言語活動に正表現が規定し得ないと同様存在しないと云ってもよい。だから、Pにおけるa(話手・書手)の表現意識に最近似値的理解を、Qにおけるa'(聞き手・読み手)の理解意識として持つ場合、これが④に当ると見るべきであろう。

この際注意しなければならないのは解釈・鑑賞の際の理解程度である。例えば

「赤とんぼ筑波に雲もなかりけり」

の俳句を読んで、読み手(a')が、仮りに、筑波山麓に育って四季折々の変化に大きな感動を享け続けたすぐれた詩才ある人である場合、作者(a)である子規が句作の折に

「秋晴れの野に赤とんぼがすい／＼と流れる様に飛び、広い野のかなたに美しい線と空に劃す藍色の筑波山が望まれる。その澄明な空には雲一つない——あゝこの秋の好天、このおだやかな静けさ……」

と感じた、その表現内容より、もっと美しくもっとすぐれた高貴な芸術的感動をこの表現を通して受け取った場合、彼

は、子規の表現（作品）によって、子規以上のものを理解したことにならないだろうか。それこそ正しい理解と云えないだろうか、という問題である。然しそれは以上の私の伝達機能の理論からはそうはならない。正しい理解とはあくまで記号化された表現を通して表現者の意味作用をより適確に把握し、自らの理解意識とすることであって、それ以上は結局それ以外と同様であることを知らねばならない。即ち、表現者のP楕円以外は、理解者a'の、Q的敷衍である。ある時はa'の、P表現以外の現実想像でもあり、理解者a'の再創作過程（但し外部表現にまで現れない範囲の過程）であることもある。また逆にこうした場合表現面Pにおいて、表現技術過程に不足があったり、記号化が偶然に内容以上の傑作に値する作品形成をする時に起こり勝ちであることも考慮する必要がある。

右によっても解るように、正表現と誤表現の間には無数の振幅があり、理論的にはたゞ理想形態という客観的類型のみが基準なのであって、一般には極めて常識的な定義としてしか使われていないことを知るのである。それで、こゝでは間違いでないもの、一般世間で通用している客観性のあるものは正しい表現・理解と見做して④に一括綜合することにする。故に

#### 「古池や蛙飛び込む水の音」

の正しい理解は、芭蕉翁の表現（文字による作品）を通して、その芸術的表現意識に等しく追ることなのである。

④の正表現を誤って理解する時。これが普通に相手の云う事、書いたものを誤解する、誤読するといわれるものである。この誤解には、主体的言語活動（上段）のb'への位置、c'の把握（概念作用）d'のフナイ気のdとの相違、e'の脈絡錯誤等、また客観的言語行為面から云っても種々あり、各種各様であって一概にその実際について述べる事は出来ないで、次の節において分類したものを示すことにする。たゞ云って置かねばならぬことは、④の場合といえども、原因は正表現にもあること多く、間違ひではないが明確を欠く表現である時、誤解を招くのが多いのであって、特に文字用法、発音、アクセント、同音異義、敬語法など、Pの表現側に関係あるものが少くない。

#### ④の誤表現を正解する時。

これは正理解の正の義如何によるが、主体的には④と同じく、相手の云う事、書くことを、そのまゝ忠実に理解することと規定すれば誤った表現を、そのまゝ正しく受預したことになる、それは結局において誤り理解となり、こゝで云う①になる。もう一つの場合の②は誤り表現をしたAに対し、Bが、それを誤りと見極めて、客観的に正しく理解する場合である。

A「この頃のラジオの漫才は全くマンネリズムに陥入っているね」

B「うん、そうだ、誰かすぐれた漫才脚本家が出て、このマンネリズムを破らない限りは無理だろうね」

Aのマンネリズムを用語の誤りと認識し、幸い万年リズムとマンネリズムの共通性から相手の云わんとする所を理解してやって次の表現者の立場にかわって行ったのである。

右の場合、誤表現を誤解して偶然に正理解に立歸る時もあるが、全く稀である。(③に関連)

③誤表現が誤理解される時。これに二つある。その一は、誤表現がそのまゝ伝達されて客観的にも誤解となる時。その場合主体的にはそのまゝ理解した意味で相手のことに関してのみ正解したことになり④の1に当る。

その二は、誤表現を、更に誤解して、客観的にも誤解する場合。つまり、主体的にも客観的にも誤りを犯している場合である。伝達そのものから云えば全く何らその機能が目的を果していない場合である。いわゆるトンチンカン(頓珍漢)とかチンブンカンブンの話し合いなどがそれである。

# (十)

以上、誤表現・誤解の基本的構造とでも云うべき条件について、主として理論的な面から考察して来た。そしてこれが言語の伝達機能を究明する上に極めて重要であることも説明した。だが、実際の言語活動における誤表現・誤解の種々相は実に雑多であって、その完全な分類さえ覚束ない程である。

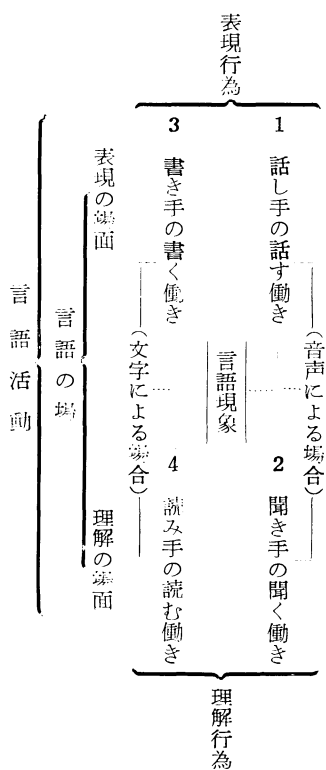
尤も「ことばの技術」等に関する最近の論文にも、屢々「ことばのあやまり」が採り上げられ、实例を挙げて、各種の条件について列挙したもの決して少くはない。例えば、

「話しことばと文法」	大石初太郎	(日本文法講座 5 P. 287)
「言語技術と文法」	宇野義方	(日本文法講座 5 P. 306 P. 314等)
「伝達の可能と条件」	熊沢 龍	(現代国語学 1 P. 43~P. 45)
「ことばの誤り」	大石初太郎	(NHK国語講座「ことばの使い方」P. 69 P. 65)
「現代語の傾向」	中村通夫	(NHK国語講座)
「誤解の条件」	永野 賢	(NHK国語講座「ことばの使い方」P. 98 P. 105)
「ゆるされる誤り」	熊沢 龍	(ことばの研究室 IV P. 30)
「慣用句の誤り」	浅野 信	( " " P. 102)
「文脈の誤り」	永野 賢	( " " P. 169)
「翻譯の間違い」	小林英夫	( " " P. 196)
「正しい理解のために」	熊沢 龍	(ことばの生活技術 P. 129)
「失言の分析」	和田 実	(ことば・話・文章 P. 233)
「誤解と曲解」	中平 解	( " " P. 253)
「聞きちがいと読みちがい」	草島時介	(言語生活昭和28年4月号 P. 20)
「誤解」	永野 賢	( " " P. 27)
「申訳ない間違いと恥しい間違い」	宇野隆保	( " " P. 34)

等とざっと挙げただけでもこんなにある。必ずしも「言語ブーム」のせいばかりでも無さそうである。そこで「ことばのあやまり」の実例や実際の言語行為分析は右の各書に譲ってこゝには取り扱わない。(今まで、実例を一々の理論づけの為に挙げなかったのも、筆者の意識的にとった態度であることを諒承されたい。筆者自らは「言語生活」(雑誌)の目・耳にあらわれた誤り例を、昭和29年一月〜32年六月まで採録・分類・分析して見た。〔甲南短大由本明子君と共同調査したもの〕この概要は最後に述べる。)

然しながら「ことばの誤り」は実際の言語行動において把握されるべきものである以上、現実の伝達錯誤の例について考察することも極めて重要であることは論を俟たない。

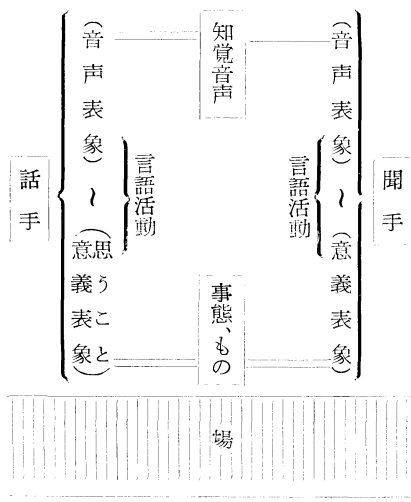
その際種々の言語現象を表現過程・理解過程の項目分類によって、実態調査することも、また有意義なことである。その際、言語行為は音声・文字の両部面に分けて表現Pと理解Qの場面のそれにおいて観察されねばならない。即ち、



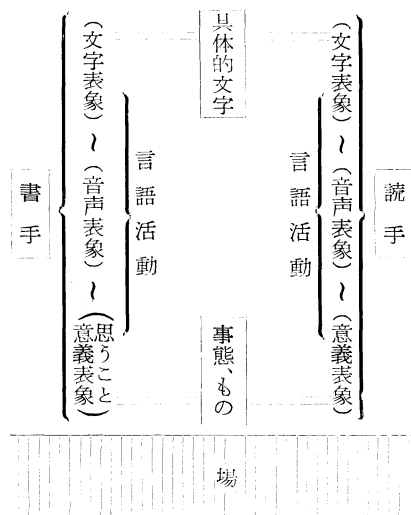
右図の言語現象の記号意味について、(一)音声による場合と(二)文字による場合を区分する必要がある訳である。何故なら、誤表現・誤解の因となり果となるところは、(一)と(二)において、かなりの相違があるから。今、その相違を、もう一度概念図(小林智賀平著「言語学初歩」P. 108 P. 109 所載)によって示そう。



話し・聞手の言語行為の図



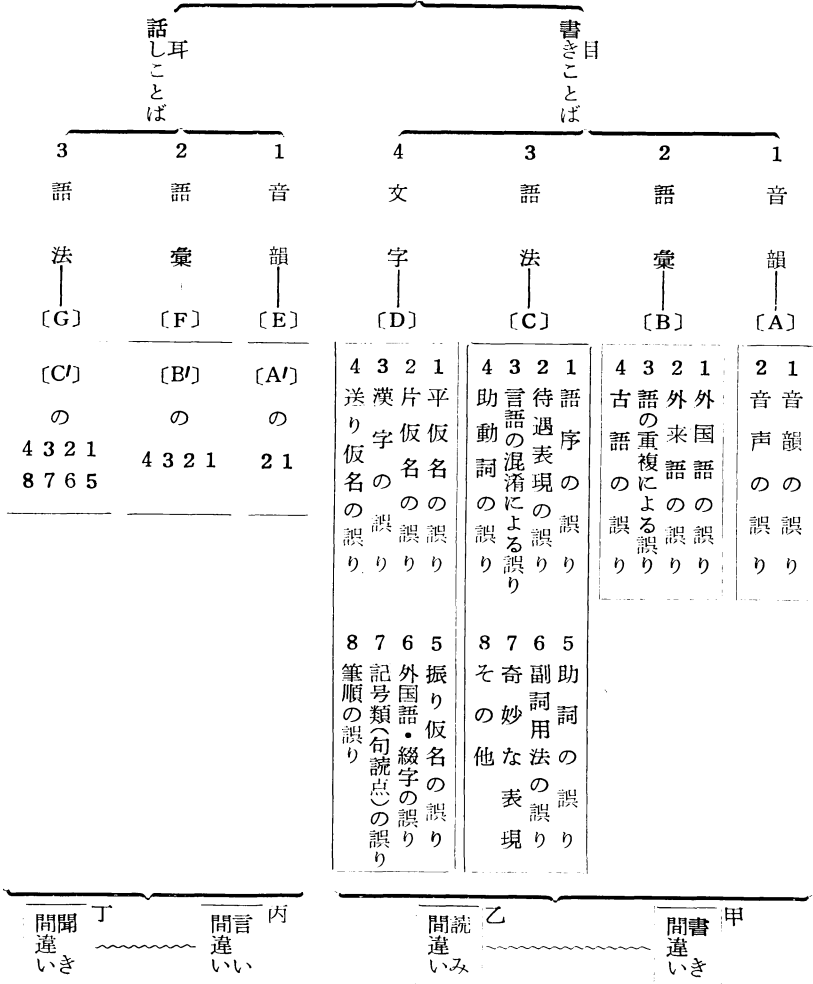
書手・読手の言語行為の図



だから、誤表現・誤理解が伝達機能の変調によって起る以上、右の言語伝達二図のあらゆる部分に各種の様相を以て現われることは自然である。それは誤表現（誤用）又は誤解せねばならなかった原因がそこにあるからである。これを「誤用の論理」とも「誤りの必然性」とも名づければ、そうした論理や必然性は言語生活の誤例の調査分類によって見出し得るものである。

その中、言語記号に関する誤りとして私のとった分類基準を次に示す。

言語記号  
(言語の誤り)



註 勿論、各種の間違いは、単独に起ることもあり、甲、乙、丙、丁の關係において、また、〔A〕、〔B〕、〔C〕、〔D〕、〔E〕……の各々が互に關連して生ずることも多い。かゝる複雑多岐の言語現象を分析的に考察する為に、形態としての記号面から見たのが右の分類であつて、かなり便宜的、觀察的になつてゐることを御承知願いたい。

又（甲―乙）（丙―丁）とのみ相對するとも限らない。例えば、速記・講義筆記・議事録などの場合は、丁から甲への關係に於て（丙を媒材としつゝ）誤りが起り、朗読や、原稿によるアナウンス等においては、（乙）から（丙）にかけて（甲を参与させつゝ）誤りが起ることが考えられる訳である。

その一例として、次に前記「言語生活」（雑誌）目耳欄の誤例昭和二十九年一月から三十二年六月までを半年毎に分ち、七段階とし、目（書きことば）と耳（はなしことば）に分け、その頻度と傾向を調査した表を掲げる。これにより、或る程度、誤例の記号面における種類別とその多寡を知り得る。（目耳欄の取材方法と記事選択に問題があるが、今はそれを一応無視する。）

表によれば、書きことばでは漢字の誤りが多く、ついで語序の誤りで、重複による誤り等少い。これは書きことばの性格をあらわすものでもある。また「耳」（はなしことば）に於ては、音の誤りが一番多く、ついで待遇表現であつて、話しことばにおける音の重要性和日本語の敬語表現の難しさを語っているし、助詞の誤り例の少いのは、話しことばにおける助詞の位置を暗示しているようで面白い。

D					G.							B. F		A. E		目 (書きことば)
誤 解	記号 の誤り (句読点)	漢 字 の誤り	平 仮 名 の誤り	奇 妙 な表 現	副 詞 の用法の誤り	助 詞 の誤り	助 動 詞 の誤り	言 語 の混 淆	待 遇 表 現	語 序 の誤り	語 の重 複	外 国 語 外 来 語	音 の誤り			
23		7				1		2	4	6		1	2	29年 前期		
27	1	10					1	2		8		4	1	29年 後期		
5								1		1	1	2	1	30年 前期		
10		3					1	3		1		1		30年 後期		
27		1	14			1		5		4		2		31年 前期		
13		6	1				2		2			1	1	31年 後期		
1												1		32年 前期		
106	1	1	40	1		2	4	13	6	20	1	12	5	計		
31					2	1	2	7	5	4	4	1	5	29年 前期		
28				4	1		2	2	6	5		3	5	29年 後期		
9				2				1	2		1	3		30年 前期		
19				6	1		1	2	6			3		30年 後期		
26				2			1	4			2	2	15	31年 前期		
11					3	1			3	3			1	31年 後期		
8				2					2	1		1	2	32年 前期		
132				16	7	2	6	16	24	13	7	13	28	計		
238	1	1	40	1	16	7	4	10	29	30	33	8	25	33	合計	

## (十一)

既に所定の頁数もかなり超過してしまつた。前の(4)節の分類項目の一つずつについて論証したいが、後日に譲るところとする。又誤解に対する曲解、誤表現に対する曲表現についても、(4)節でふれた以外には特に詳論出来なかつた。この曲解の種々な言語相の分類と實際も興味ある問題である。また不精密とか不明瞭な表現、好ましくない表現、品の悪い表現等、誤表現に一連する問題についても十分考察し得なかつた。殊に誤表現・誤解が醸し出す滑稽さ、ギャグ、諧謔、皮肉、諷刺、悲哀等と、それらの応用面(「誤用の論理」の逆用による漫才落語の類)については是非近い将来解明したい所の問題である。

(註 1 ④) 「誤用」の用語は「誤つた語」を使用した。「ラングの用法の誤り」を意味する傾きがあり、私の言語観と相違するのでこの術語を使わない。実は一番便利で簡単なのだが。

(註 1 ③) 時枝誠記「国語学原論統篇」p. 52「伝達全体の問題としては誤解と同時に、誤つた表現(誤表)し考察の対象にならなければならぬのは当然である。」

(註 2) 「ことばづかい」が正しい、正しくない、即ち「正用・不正用」又は「正表現・誤表現」とは何かについて、機能言語学的立場に立つアンリ・フレ(Henri Frei)の「誤用の文法」(La grammaire des fautes) (Paris P. Ceuthner, 1929)「小林英夫訳」には、

社会一般の考えるような一般的規範ではなく、一定の機能への適合の度合に依存するもので、その機能とは、表現性・明晰性・言語経済等、最も表現にも理解にも容易であることにある。普通文法的に誤つた表現と云われるものはこの機能を果すためのものである、と述べている。

(又この項に関しては国語学辞典「文法論」の項「目的論的文法」を参照されたい。)

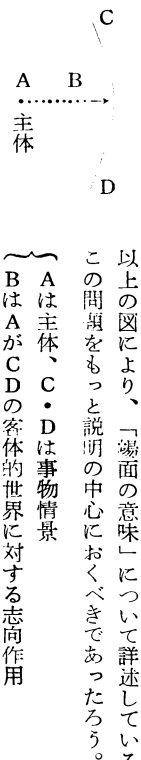
(註 3) 明治三十八年十二月二日付官報「文法上許容スヘキ事項」十六ヶ条。

例えば、その「文法上許容ニ関スル事項」の第十三条、第十五条には、「十三、語句ヲ列挙スル場合ニ用キルてには「ト」ハ誤解ヲ生ゼザル時ニ限リ、最終ノ語句ノ下ニ之ヲ省クモ妨ナシ」とあり、又、「十五、てにをハ「モ」ハ誤解ヲ生ゼザル限リニ於テ「トモ」或ハ「ドモ」ノ如ク用キルモ妨ナシ」とある。（傍点筆者）

- (註 4) 国語学辞典 「誤 解」 (言語生活・社会心理) の項「時枝誠記」 P. 378  
簡単に拔萃する。

「伝達の一 種で正解・曲解に対する。……伝達が成立するためには、話し手が表現の媒材とした音声または文字が聞き手に知覚されることが必要である。もしこの知覚が遮断される場合には、伝達が不成立になる。……伝達が成立した場合でも理解者が、表現者が表現しようとしたものとは別の表象や概念を思い浮べた時、これを誤解と云う。……誤解の原因」理解は知覚した音声または文字に、それに相当する表象または概念を連合させることであるから、誤解の原因は、この連合過程にあるわけである。……」

- (註 5) 波多野完治著 「文章心理学」、波多野完治著 「現代文章心理学」 参 照  
(註 6) 勿論、時枝誠記 「国語学原論」 (昭 16) 正篇にも、



又、現代国語学 I 「ことばの働き」中『場面とことば』永野賢 P. 133~P. 148 言語の「場」について同論文注(二)に挙げる参考文献をも併せて参照されたい。

- (註 7) 国立国語研究所の永野賢はじめ、大石初太郎、塚原鉄雄、宇野義方諸氏の考え方がそれである。  
(註 8) 前掲出「場面とことば」(現代国語学 P. 137) 参照  
「言語の観察者は、客観的な「事態」をとらえることは出来るが、言語主体の意識内における「場面」をとらえることが

果たしてできるか、どうか。」

「『事態』は無限の可能性を持つが、『場面』は類型として有限だからである。」

(註

9

) 前註8と同書 P. 147 にある如く、永野賢氏が以前「心理的環境」と呼び、後に「フンイ気」とそれを改めた用語

(註

10

) 永野氏は『心理学では「場」を使うのが普通だが、ここでは国語学の慣用に従い「場面」を採用することとする。』(「場面とことば」——『現代国語学』P. 147)と「場面」の用語を使うが、言語心理学的立場に立つ筆者としては、「事態」と「場面」を総合的によぶ「場」の必要性もあるから「場」の用語をも別に採用する。もっとも、主体的立場のみを「場面」と呼ぶことは強ち不自然でもなく、「場面」という日常言語生活性をよく表現するのであるが、それだけに通俗觀念も入り易いことに注意すべきである。また、この他(客觀的立場を「事態」とせず、高橋太郎氏のように、それを「場」と呼んで兩者「場面」と「場」を区別して使い分けるのも一つの方法である。が私は場【事態】場面という意味において、いわば、事態(客觀)と場面(主体)を止揚する二次的反省のものを「場」と呼ぶわけである。

(一九五八・二・一五)